

子宮がん検診（車検診）

動 向

検診車による子宮がん検診は、昭和43年度から開始され、県下市町村からの委託事業として当協会が配車し、細胞診断と結果広告を担当している。検診は県下の北里大学・東海大学・横浜市立大学・聖マリアンナ医科大学・日本医科大学武蔵小杉病院の産婦人科の医師が担当し、この5大学と県立がんセンターの婦人科腫瘍専門医からなる「子宮がん車検診実施検討会」で、精度管理・向上に努めている。

一昨年度から「再診者」を従来の車検診既受診者から変更し、“最近3年以内にいずれかの施設で検診を受診したと申告した者”と規定している。

子宮頸がん検診結果

検診実施数は17,612名で、昨年度より3,167名減少した。年齢階級別では、やはり60歳代が最も多く、次いで70歳代以上、40歳代と50歳代の順で、高齢者に多かった。期待された30歳未満の受診者は昨年より少ない374名だったが、同率の2.1%だった。40歳未満では10.0%と昨年並みだった。また、初診者（初めての検診受診者、3,468名）は19.7%に止まった。うち若年者の割合は30歳未満6.1%、30歳代12.1%で、昨年より少し改善した。

要再検・精検率では、細胞診LSIL以上（旧分類クラスIIIa以上）の要精検者は0.56%（98名）、ASC-US（クラスII再検）による要再検者は0.72%（126名）だった。昨年の0.62%、1.05%より低く、両者合わせた要再検・精検率は1.27%だった。再・精検の実施率は平成29年8月末の集計時点で91.96%、うち精検者97.96%、再検者87.30%だった。昨年度以上に高い水準で、本車検診の誇れる成果である。

要再検・精検者の再検・精検結果は表3～7の如くである。発見がんのうち頸がんは9例（扁平上皮内がん5例の外、IA期、とIB期各1例、病气不詳2例）ならびにⅢb期体がん1例で、早期がんの頻度は55.6%だった。頸がん発見率0.05%は例年の0.02%を上回った。初診者からの頸がん発見率は0.2%と高かった。一方、再診者（検診受診経験者）からも上皮内がんとIB期が各1例発見されている。初診者でのがん発見率では、最も高い発見率が近年では40歳代から30歳代に若年化していたが、本年度は20歳代に0.47%（1例）と高かった。初診者の多い30-49歳の若年者で高い頸がん発見率であることには変わりがないが、50-69歳での初診者でも3例（0.24%）を記録した。

発見された異形成は86例（軽度48例、中等度17例、高度21例）である。異形成発見率は0.49%で、

昨年の0.44%より高かった。初診者の、異形成の発見率は1.01%と一層高く、年齢階級別では30歳未満1.89%、30歳代1.91%、40歳代1.42%を示し、若年初診者に高かった。しかし、40歳以上でも0.81%を示していた。再診者からも、異形成は0.36%の高頻度で発見され、とりわけ30、40、50歳代ではそれぞれ1.12%、0.65%、0.46%と高い頻度だった。さらに年長者でも発見されている。繰り返し受診者であっても異形成の発見頻度は低くないことを銘記してきたい。

細胞診判定ASC-USのため要再検となった者126名から、異形成が29例（0.16%）（軽度20例、中等度5例、高度4例）が発見されている。

頸がん以外のがんでは、体がん1例が発見された。

評 価

若年者の受診は期待に反して伸び悩んでいた。20、30歳代の若年者では異形成や頸がんの発見率が高いところから、若年者の検診受診が一層勧奨される。

これまで、要再検・精検実施率の高い実績を誇ってきている。一次検診を担当した県下各大学に誘導することによって達成できたことである。一時低下傾向にあったが、本年度は100%近かった。本検診と二次検診を担当して下さる各大学の連携の成果である。

子宮頸がんならびに異形成の発見率は初診者に高いことはこれまでの統計通りであり、未受診者への受診勧奨に一層努めたい。一方、再診者でのがん発見率は著しく低下するものの、異形成の発見率は0.36%と高頻度を示していることから、再診者へも定期的な検診受診の継続が勧奨される。

総検診数の低下は、2市から検診事業の委託が得られなかったせいであろう。より良い検診環境の整備に努めたい。

細胞診報告様式であるベセスダシステム準拠日本産婦人科医会分類は順調に普及しているが、新基準であるASC-USにより要再検の頻度が上昇傾向にある。しかし、その本年度は0.72%に止まっており、適切な精度で細胞診断業務が遂行されたと言える。

本年度の車検診実施検討会では、平成28年度の実績の検討に加え、委員の一人である横浜市大・宮城悦子主任教授から「子宮頸がん検診の課題」と題して、世界での先端的な検診の動向についての講演を拝聴した。当車検診の発展と精度向上に繋げたい。

関係の集計表は92頁に掲載